

スモール子牛導入による 一貫肥育化への転換を!

表1. 乳用種去勢牛の取引状況

| 年度 | 価格(円) | 体重(kg) | 日齢(日) |
|---------------|---------|--------|-------|
| 2010年度 | 82,573 | 266 | 224 |
| 2011年度 | 90,370 | 270 | 226 |
| 2012年度 | 91,856 | 272 | 229 |
| 2013年度(4-11月) | 120,139 | 276 | 229 |

(独) 農畜産業振興機構HPより
 ※農水省の調査(2013年11月公表)では乳用雄育成牛生産費(100~200頭規模、家族労働費は除く)は約10万円となっており、一貫肥育化により1頭あたり2万円程度の畜産費メリットがあると推定される。

表2. 乳用種去勢牛の枝肉成績の推移(全国平均)

| 年度 | 出荷月齢(カ月) | 枝肉重量(kg) | 3等級以上率(%) |
|--------|----------|----------|-----------|
| 2003年度 | 20.3 | 439 | 11.0 |
| 2006年度 | 19.7 | 430 | 8.1 |
| 2009年度 | 19.3 | 434 | 5.5 |
| 2012年度 | 19.5 | 439 | 3.7 |

※(公社)日本食肉格付協会HPおよび(独)家畜改良センターHPより

素牛相場が高騰を続けるなか(表1)、収益性改善のため、約1カ月齢の「スモール子牛」を導入する一貫肥育化が推奨されている。乳用種去勢牛肥育農場で、素牛導入からスモール子牛導入に変更し、生産性を向上した取り組み事例を紹介する。

農場の概要

当農場は、乳用種去勢牛を年間400頭程度出荷している、家族経営の肥育農場である。もともと北海道から約7カ月齢の素牛を導入していたが、素牛が高騰してきたことから、5年前よりスモール子牛の導入を開始した。現在は、ほぼすべてが「スモール子牛導入からの肥育」に切り替わっている。表2の「枝肉成績の推移(全国平均)」のとおり、乳用種去勢牛の肥育では「3等級以上率」が4%以下にまで落ち込み、肉質の改善が困難なことから、出荷月齢の短縮と枝肉重量の増大が生産性向上の重要なポイントになる。

一貫肥育転換後の成績改善効果

子牛段階から飼育管理することができるため、自ら育成ステージを管理でき、1日あたりの増体重を示すDG(平均)が1.2を超えるようになった。また、スモール子牛の導入に切り替えたことで、出荷月齢が約1カ月短縮でき、枝肉重量も15kg近く増大した(図1)。

「3等級以上率」は変わらないものの、バラ厚やきめ・締めりなどは改善しており、枝肉購買者からの評価も高まっている。なお、その他メリットとして子牛補給金を受け取ることができるようも挙げられる。一方、子牛段階の事故率抑制が大きな課題となる。当農場も子牛の飼育管理は初めてであったことから、スモール子牛を導入してしばらくの間は、率

事故率抑制の施策

具体的にはJACクリニックなどを活用して血液検査を行い、農場内の病原菌や抗体価の動きを確認したうえで、適切なワクチンを適切な時期に接種できるように衛生プログラムを確立した。また、導入直後2週間は移動ストレスもあり、抵抗力も落ちていることから、毎日の体温測定を徹底。子牛の状態をチェックしている。更に、防寒対策としてビニールフィルムや防風ネットを牛舎に張りつけたり(写真1)、冬期には毎日、煙霧消毒器を使って空気消毒をしたりしている。加えて、子牛段階の敷料を従来より50%増量することで床を厚くし(写真2)、腹冷えしないような肺炎対策の工夫もしている。

今後の取り組み

これらの取り組みの結果、当初多発していた子牛の肺炎も予防することができ、事故率も3%程度に抑えられた。今後はこの5年間で習得した子牛の飼養管理技術をベースに、和牛繁殖経営も一部取り入れ、農場の収益性を更に高めることを目標としている。

図1. 農場の枝肉成績の推移

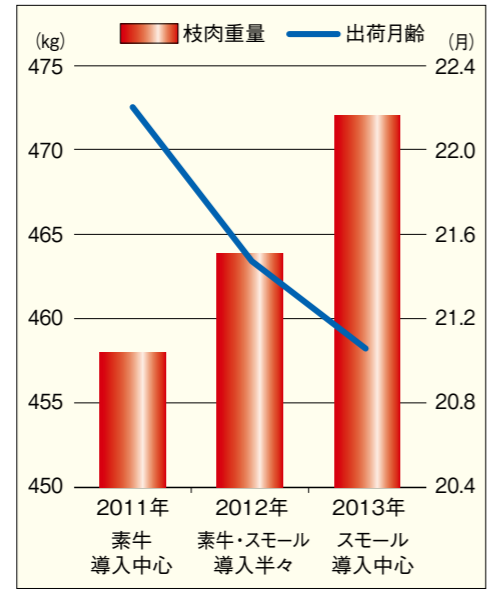


写真1. ビニールフィルムを張りつけた風除け対策



写真2. 子牛の敷料を1.5倍に増やした



写真3. 肥育用飼料はマッシュ形態とし、コストを低減した

所在地: 関東地方
 飼育頭数: 乳用種去勢牛600頭
 従業員数: 2.5人